

帝国主義の腐朽性に抗し
 共同反革命を蜂起-内戦へ！
 共産主義者同盟（戦旗派）

戦旗

10月20日
 5日、20日発行
 409号
 1部 100円
 編集発行人 鹿島 昂
 購読料 1部 20回 2600円
 （郵送料含む）

戦旗社

東京都新宿区新宿5の2の9
 コーポハビービルE1号
 電話 03 (356) 2982
 振替 東京7-26110

10万署名・建設の総行動を

釜山・馬山でついに大暴動！
 危機にたつ朴—大平を追撃
 せよ！日韓閣僚会議粉砕！

全国の同志・友人のみなさん！

日帝・大平によって強行された10月総選挙は、自民惨敗という人民の厳しい審判によってその幕を閉じた。

八〇年代にむけて、自民党大平政権の長期安定化をもくろんだ大平の夢ははかなくついで去った。「大平退陣」を要求する自民党内の派閥抗争は一挙に激化し、政局は混乱の度を深めるばかりである。

激動の八〇年代、「戦争と革命の八〇年代」は、ここにそのトビラをあけたのだ。

今こそわれわれは、真に人民に依拠し、人民の利害を守るためだけにたたかう唯一無二の革命派として、大飛躍、大躍進をとげていかねばならない。噴出する帝国主義社会体制の矛盾が、そしてこれに抗してたたかう全国無数の人民大衆が、真の革命派の登場を待ち

望んでいるのである。

日帝大平による戦争への国民動員と対決する圧倒的な人民結集をかちとること—このようにして設定されたわが秋期政治決戦の勝利の展望は、この総選挙結果の中にもはっきりと刻印されている。

これまでの狭い活動の枠をつき破り、広範な労働者人民の支持と結集をかちとりうる主体の飛躍こそが問われているのだ。

一〇・三一狭山、一一月日「韓」閣僚会議粉砕闘争の大爆発をかちとり、全党の意志の結集をもって現闘小屋改築をなすとげ、管制塔一〇万署名の一大人民運動の勝利を何があんでも実現しぬいていくこと—秋期政治決戦の完遂をかけて、今一層の奮起をたたかいたい。うではないか！

激闘の80年代へむけ、朝鮮出兵阻止—日韓連帯のたたかう戦列をうち固めよ！

八〇年代政治危機の到来を告げた七九総選挙

東八〇年一二月の衆議院任期切れに一年を余す今秋九月、野党や自民党内他派閥の反対をおしきって、日帝大平は、衆院解散—総選挙を強行した。

大平のもくろみは、野党が必死になっておめきたてた「自民党の党利党略や、大角連合の派利派略」にとどまるものではなく、八〇年代における日本帝国主義の延命をかけ、戦争と差別、人民収奪の支配構造の確立をはかる。日帝支配階級の重大な政治的挑戦であった。

今春地方選において、公明・民社ら中道と手を組み、「革新自治体」壊滅の戦果をあげた大平は、満々たる自信をもって「安定多数二七〇議席以上獲得」をめざしての金権選挙を全面的に展開したのである。

しかしながら開票の結果はどうであったのか？

自民は前回から一議席減らして二四八、社会は一〇議席減の一〇七、公明は一増で五七、共産は二〇議席増やして三九、民社は一増で三五、新自は九減の四、社民連は一減の二、無所属一九（このうち五名を自民が追加公認）これが議席上の結果であった。

ここに於いてわれわれが第一に確認せねば

寺尾判決五カ年糾弾！再審決戦勝利！

10.31 狭山中央闘争

一時 明治公園

戦争動員の強権政治、自民党のおごりにまっこうから「ノー」をつきつけたのだ。

第二に確認できることは、大敗を喫した自民にとってかわるべき社共—既成革新の混乱、無力化の深まりである。

野党第一党の社会党は、中道の結束と共産の「左」からの食いこみによって、ますます混乱と分裂を深めている。

ならないことは、自民の無様な敗北であり、大平による「安定多数獲得—単独強権支配」のもくろみがもののみごとくにうち砕かれたということである。

自民党は、得票率こそ前回の史上最悪といわれたロッキード選挙よりも二・八%浮上し、戦後一貫した低落傾向にようやく歯止めをかけたものの、それすら前々回七二年の総選挙には及ばず、「保守復調」とは到底いえる内容ではない。絶対得票率（有権者総人口中の比率）からしても三二・六%（これは棄権者比率と同じ）と、日本国民の三分の一の支持すらとりつけていないのである。

得票率増大にもかかわらず議席減という事態も、単に技術的敗北ですまされる問題ではなく、「党籍証明」の乱発（一二名。前々回二、前回〇）に示される自民のおごりに対して、人民が厳しい審判を下したという以外ない。

日本人民は、大平による増税・人民収奪・戦争動員の強権政治、自民党のおごりにまっ

唯一議席を倍増し、かちどきをあげている共産党も、得票率の横ばい(〇・〇二%増)に示されるように、腐朽化した日本帝国主義の現状を力強く打破しようとする内実と活力を有しているわけではない。

「重点区方式」とよばれる「勝てる選挙区」への周辺地区活動家の集中、そこでの自民党ばりの「個人後援会」「地元利益優先」のあくどい選挙運動への転換が、議席増をつくりだしたわけであるが、この転換は日共の地区党構造を瓦解させ、まったくの「選挙区」への転落、固定化を促進するほかになくならないのである。

第三に見ぬかねばならないことは、「選挙協力」によってようやく現状を維持した中道勢力の存続は、日帝大平の延命を助ける以外ではないことである。

自民批判票の一部を得ることによって、総体として現状を維持した中道諸派は、にもかかわらず、自民党を批判するどころか、自民党以上の危機感をもって、日帝支配構造のグラツキに対処しようとしている。「自民が議席を割れば割るほど、われわれは必要なものには賛成して、より建設的な提言をしていく」(民社・塚本書記長)。

こうした「第二自民党」たる中道勢力の存続こそ、「エネルギー政策」など基本的問題については超党派でとり組んでもらいたい。そうならなきゃ、日本はダメになっちゃう(黒川久・石油化学工業協会会長)、「三菱油化社長」という日帝大独占の利害を先どりし、日帝大平の延命に道をひらく安全弁となっているのだ。

だからこそわれわれは **第四に** こうした「保革伯仲」ならぬ「保革共存」によってますます進行する議会の空洞化をしつかりと見なす。大平の戦争への総攻撃と対決する人民の一大潮流形成の決定的重要性を心に刻みこんでいかねばならないのである。

「大敗」の責任をめぐって派閥抗争を激化させ、「これまで通り」の支配に自信を失なつた自民党、「保・中連合」の意図を一層鮮明にした中道勢力、「選挙党」国民議会議会党へののめりこみを深めた日共、その間にたつてますます没落する社会党、そして史上二位という棄権率の増大(大都市選挙区では何と四四・三%に上る)に示された、「保革なれあい」議会への人民の失望の高まり―これが七九総選挙の結果であった。

こうした構図の下で、八〇年代政治危機の基調は、議会の空洞化とそれを補完する官僚・軍隊・警察による専制的支配への傾斜、そしてこうした構造を糾弾する戦闘的大衆運動の激発として推移する以外にない。

八〇年代における日帝ブルジョアジーの延命の道が、安保―日―韓―体制の死守―戦争への国民総

動員というただ一点にひきしぼられ、自民党内の抗争も逆にそうした戦争への破局的衝動、フアツシ支配への転換を強めるばかりとなつて今日、問われているのは、戦争・差別・収奪の攻撃に対する日本人のありとあらゆる抵抗闘争を一つにまとめあげ、第三世界人民の解放闘争に真に連帯しうる朝鮮出兵阻止・日帝打倒の―大人民潮流を形成しきることなのだ。人民のたたかいに根づき、苦楽を共にし、刻苦奮闘することのなかで、この壮大なたたかいを双肩になうことのできる政治的能力、組織的力量、党と人民の団結を、われわれ一人ひとりがつちかいうるのいかいなか―問題の核心はここにあるのである。

10・16釜山蜂起は朴を危機のドン底にたたきこんだ

既に伝えられているように、一月一六―一七、ついに韓国民衆の怒りは爆発した。釜山に蜂起した労働者と学生数千名は、六〇年四・一九、六五年日「韓」条約締結反対闘争につぐ大街頭戦にうつてたのだ。

この偉大な決起の本質をつかみとるために、われわれはこの一月に入つての韓国の政治動向をまづおさえておかねばならない。

一月四日、朴の指令の下で韓国議会議長・民主共和党と維新政友会(朴の指名による御用議員が構成する)は、野党・新民党総裁金泳三(キム・ヨンサム)氏の国会議席剝奪という大暴挙を行った。

この暴挙を予測した新民党議員数十名が本会議場議長席を占拠して抵抗する中を、私服や機動隊を導入し、何の審議もなまま一分足らずで懲罰・除名動議を可決したのである。

新民党院内総務が「これでわが国には野党も民主主義もなくなつた」と涙を流して語つたといわれるように、これこそは、韓国議会議場史上にも類を見ない暴挙であり、七二年大統領選での金大中氏ひきざりおろし―拉致・暗殺の策動につぐ大陰謀である。

しかもこの策謀は、単に議院内の野党対立という独立したことごらだというのではない。

これに先だつ一月二日、板門店で開かれた軍事休戦委員会、朝鮮民主主義人民共和国代表は、一月一日のオンジョン半島上空侵入をはじめ、この一カ月間に米機が八回に及ぶ領空侵犯を行つた。また、九月一六日には南朝鮮軍が共和国側要員に銃撃を加え、同様の銃撃行為はこの一カ月間で三〇回に及ぶと、米・韓両国の計画的で故意の挑発に抗議するとの声明を発表している。

また、一〇・四暴挙四日後の八日には、今年四月「統一革命党」を再建しようとしたという容疑で逮捕・起訴されていた朴東圭氏(高麗大研究所員)や池禎官氏(フランス通信社東京特派員)ら七名の被告に対して、無期懲役を含む全員有罪判決が下され、さらに翌九日には、建国後最大規模の暴力革命グループと銘うって、李在汝氏ら元学生や教師七四名の摘発(うち二〇名を既に逮捕)を大々的に発表した(この「摘発」の真相は、学生決起によって大学を放校されやむなく強盗を働いた三名の元学生らの「白日」によるまったくのデッチあげである)。

外に対しては戦争挑発、内に向かつては民心収約のための見せしめ弾圧、こうした一連の末期的な「政治の流れの中で、有無をいわせぬ野党封じの弾圧として、金泳三氏への除名決議が強行されていったのである。

もはや韓国には、偽装された民主主義―すらも一かけらだにない。いや、政治上の自由や権利はおろか、人間として生命を維持していくための最低限の生活をも、朴と日帝資本・買弁ブルジョアどもは韓国民衆から奪い去つたのだ。そして今、甘い汗を吸いつくした日帝侵出企業の一部は、韓国国土の荒廃と民衆生活の目をおおわんばかりの疲弊を残して、韓国からの撤退を開始しているという。

八月初旬に暴露されたジェトロ・ソウル事務所秘密報告は、「韓国の馬山輸出自由地域におけるわが国進出企業の半分以上は、適正な価格で資産を売却できれば韓国から撤退したいと表明している」。

「人件費の急騰、原油値上げを引き金とするインフレ加速から、対米輸出拠点・加工拠点としての韓国の妙味は薄れた」と、血も凍るような帝国主義侵略者の本心を述べたてている。「わが国進出企業の半数以上」とは、韓国基幹産業の骨格にからみつき、朴と運命をともにしている日帝独占諸企業をのぞく、「ぬれ手にアワ」のポロもつけを狙って侵出した日帝中小企業のことであり、これらの「撤退」のあとに残るものは、第二、第三の、無数の「YH貿易労働者」なのだ。

すべてを奪いつくされ、ポロキレのように投げ捨てられた韓国労働者の、すべてを奪いかえすための決起、これこそが一〇・一六―一七釜山蜂起の本質である。釜山労働者の流血の大決起の中に、今まさに全泰孝氏の、金景淑さんの血はよみがえり、全韓国民衆に朴打倒・日帝放逐の明日を告げ知らせているのである。

釜山民衆のうちならした歴史の警鐘は、ひとり日帝―朴に対してのみむけられたものではない。朴を支えて二〇年になんたんとする日帝の、その足下に生きるわれわれ日本人民に対して、韓国民衆のときの声はあげられたのだ。

もはや朴を支えるものは、日・米両帝国主義のむきだしの暴力以外に何一つなくなつてきている。日米帝に、朴に手を借すのか、それとも韓国民衆のすさまじい決意に徹底して学びぬき、韓国民衆とともに帝国主義放逐のたたかいにたつのか、この二者択一が、日帝足下人民に心底迫られているのである。

憎むべき米帝は、第二の朝鮮戦争をひきおこし、朴体制の危機を転嫁するための武装挑発にやつきとなり、金泳三氏除名への「遺憾の意を表明するための駐韓大使召還」などという茶番劇をも演じきれないままに、七月一八日目の米・韓安保協議会開催を予定通り強行しようとしている。

そしてわが日帝は、九月一二日、第一一回日「韓」定期閣僚会議を一月にも東京で開催する、と表明している。総選挙後の第一の課題として、朴への全面的なテコ入れをかけたてているのである。

これとたたかわずして、朴や日米帝の糾弾も、日韓連帯民衆も、一切は空語である。

同胞の未来のために一身を投げうち、死してなおたたかいたい全泰孝氏、金景淑さんのたたかいに徹頭徹尾学びぬき、釜山民衆の流血の決起に続こう! 一月一日「韓」閣僚会議の東京開催を絶対阻止しぬき、日韓民衆連帯の内実の全面的深化を何としてもかちとろうではないか!

10・31狭山再審決戦の大爆発で、年内棄却攻撃を葬り去れ

10・9 検察側差別意見書攻撃を徹底糾弾せよ!

当面するわれわれの第二の課題は、一〇・九検察側差別意見書攻撃を徹底糾弾し、一〇・三一狭山再審決戦の大爆発をたたかいたことである。

一〇月九日、東京高検は、これまで弁護団から提出された再審請求の意見書、補充書に対する検察側意見書を、東京高裁―四ツ谷に提出した。

その内容は、七項目にわたる意見と結論からなり、「石川氏ハクロー」なるうそとペテンにみちみちた許しがたい差別文書である。

その内容は、七項目にわたる意見と結論からなり、「石川氏ハクロー」なるうそとペテンにみちみちた許しがたい差別文書である。

とりわけ注目されるのは、五月に提出された弁護側新証拠―石川氏の無実を満天下に示しぬいた「脅迫状日付」問題であるが、検察意見書は、石川氏は二八日に脅迫状を書いたので、二九日と書きつけたことと混同した「すべては石川氏の記憶違い」という許すことのできない「論拠」で口をぬぐっている。あたりまえの論理をもってしてはどうしても石川氏を犯人であると説明できないところ、追いつめられた検察側は、またもや使いふるされた「石川氏「ウソつき」という決まり文句をひっぱりだしてきたのである。

「ウソつき」が検察側の方に他ならないことは、事実がはっきりと説明している。石川氏は、脅迫状を目の前において（それを使って字の練習までさせられて）「自白」を行って居るのであり、石川氏が真犯人であれば、自分が書き、消した文字の読みとりを間違えようはずがない。

「真犯人が書いた「二九日」とは、空想上の、ただの数字なのではなく、実際の犯行計画に即した、生きた生活の脈絡の上での「二九日」であって、書いた日時と、書かれた日付とを混同するなどということは、事件から一〇年もたつて事実の迫真力に迫いつめられた検察権力者の頭の中でおこりえないことなのである。

石川氏は真犯人ではないがゆえに、消された文字の「真実」を知らなかった。この文字を最初に読みとり間違えた埼玉県警―狭山署の取調べ官のいうがままに、「二九日」を「二八日」と「自白」続けたという、その事実そのものが、石川氏の無実と、無実の部落青年を犯人にデッチあげた権力犯罪のおそろべき実態を雄弁にものごとく語っているのだ。

窮地にたつた検察側は、最高裁の筆法を借り、個々の点で問題はあるが、総体としてはクロ」という、誠にふざけた結論で意見書をまとめている。われわれは、卑劣さと邪悪さを絵に書いたようなこの検察側差別意見書を徹底糾弾し、全人民の前に（無実・差別）をあらわす。

管制塔10万署名―現闘小屋改築を完遂し、廃港勝利の展望をきりひらけ！

われわれにとって第三の課題は、**管制塔10万署名達成―四戦士年内奪還を勝ちとり、一月現闘小屋増改築を完遂する**という二つの任務である。この二つの任務は今秋期政治決戦の完遂にむけたわれわれの主体的課題として、ゆるがせにすることのできない重大な闘いである。

くことなく暴露・宣伝しつつしていくのでなければならぬ。
部落大衆のゼッケン登校・走りこみ闘争に応え、10・31総決起をたたかいとれ！

いづれにせよこの検察意見書提出をもって、闘いの舞台はいよいよ高裁に移り、日帝―四ツ谷との本格的攻防局面に突入した。年内棄却攻撃を許すのか否か―われわれは水ももらさぬ決戦陣形を堅持し、再審闘争の一大飛躍を勝ちとっていかねばならない。

間近にせまつた再審決戦の環、
 一〇・三一闘争に向けて、部落解放同盟は、全部落児童生徒によるゼッケン登校と、首都におけるすわり込み闘争へのとりくみを明らかにしている。

部落の少年・青年たちが、ブルジョア社会のさげすみにみちたまなざしをはねかえし、自己の内面における血のしたたるような葛藤・苦悶を克服しながら、決然とゼッケン登校にたちあがるとき、その姿はわれわれ一人ひとりの存在を激しくゆさぶらさずにはおかない。何よりも問われているのは、単なるスケジュール闘争、個別課題一般としての狭山へのとりくみではなく、われわれ一人ひとりの内発的な決起であり、思想的内実なのだ。

たちあがる部落青年の姿こそは、骨の髄まで腐敗しきり差別と抑圧にみちみちた帝国主義社会体制の対極にたち、この現状を根底から打破しうる力と勇気の体現者である。この闘いに学ぶこと、彼らの苦闘のひとつ一つをなぞり、われわれの生活と生涯の全的な革命化をかちとることなしに、狭山の勝利も部落大衆への血債の償還もありえないのである。

二・一二集会をきり口として、この一年間にかちとってきた狭山闘争への内在的連帯の真価をかけた、一〇・三一決戦の大爆発、狭山再審決戦の全人民の高揚をたたかいとっていかうではないか！

粉砕を実行する」という三里塚農民の闘魂を全人民に示した。そこで打ちだされた四つの方針は、
 一〇・二飛行阻止現地大行動を突破口として、着々と物質化されてきている。

三里塚農民は、敵権力の放つた窮余の一策―「対話なる同盟破壊・闘争解体の攻撃をうち破り、連日連月の攻撃にうって出たのだ。こうした三里塚闘争の現局面において、わが戦旗派は、二期工事予定地B滑走路アプローチエリア内に存在する第三一団結小屋の全面的な改築を挙行することを決定した。

この小屋改築の事業は、わが戦旗派の三里塚闘争にかけざる情熱と気概を満天下に示しぬくとともに、三里塚農民に学び、三里塚農民とともに闘いぬくための不拔の拠点作りとして遂行されなければならない。

敵権力―公団は、陰湿かつ卑劣きわまりない「対話攻撃をもって反対同盟にゆさぶりをかけ、三里塚一四年の歴史の中でつちかわれてきた農民と労学支援助勢力との団結をうち砕こうとやっきとなつてきた。「成田立法」―団結小屋破壊の攻撃が、労農学一体となつた闘いによってあえなく敗れ去つた今、三里塚闘争の核心である「反対同盟農民の存在」そのものをグラつかせることによつて、支援勢力の現地からのたたき出しを狙つてきたのである。

こうした現状の中で敢行するわれわれの増改築の事業は、「支援勢力の撤退」を夢見る権力に痛打を浴びせ、労農学の固き団結を何よりも明白に示すものである。われわれの親愛なる「オヤジさん」、熱田さん一家をはじめ、反対同盟農民はわれわれの計画を心から歓迎し、惜しみない支援と協力を約束してくれている。

権力によるありとあらゆる妨害弾圧をはねのけて、全党の意志の結集で小屋改築を立派にやりとげ、反対同盟の革命的信義に応えぬこと、これが一月におけるわれわれのもっとも党的、主体的な任務なのである。

この事業の完遂を通して、われわれは、単に二期決戦にむけた物質的拠点を確保するというにとどまらず、われわれの心の中に三里塚連帯、廃港勝利の拠点をより強固にうちたてていかねばならない。思いおこせば三年前、七六年の七月に、三里塚反対同盟は、三年間にわたる現闘活動からの召還という痛苦な歴史を負つたわれわれに、こころよく小屋建設地を提供し、三里塚をたたかう戦列に復帰することを許してくれた。われわれはこの信義に報い、現闘召還の血債を償わんとする力のすべてをつぎこんで奮闘し、偉大な三・二六戦闘の一翼をになう名誉にもあずかってきた。

しかしながら、われわれが三里塚闘争をたたかう中で得てきた限りない成果に比べれば、われわれの果してきた役割はまだまだ微小であり、われわれの闘いの質は三里塚農民の苦闘には及ぶべくもない。われわれは何よりも、この現闘小屋改築のたたかいは契機に、こうしたわれわれのたたかいは一切をとらえ返し、とりわけこの一年間追求してきた同盟農民との内在的な連帯の深化、強化をなすきる中で、飛行実力阻止―完全廃港への決意をうち固めるのでなければならぬのである。

管制塔10万署名運動にとりくむはあたつて、われわれが第一に確認しなければならぬことは、管制塔被告の保釈奪還を勝ちとれるか！

管制塔被告の保釈奪還を勝ちとれるか！これがカギは、一にかかつて一〇万署名達成の成否にあることである。

戦線の内部には、「あれだけのことをやったのだから当分は出られない」「検察側立証が終らなければ無理だ」等々の見解が存在している。こうした見解の誤りは、権力とのたたかいは戦闘の現場にのみ求め、法廷闘争の重大な意義を看過していくような傾向であるとか、その裏返しに法廷技術至上主義的傾向、あるいはまたたかかう前かからあきらめてしまふ敗北主義などとしてあるわけであるが、われわれはまず、こうした弱気をわれわれ自身の中から一掃しなければならぬ。

一〇万人という人民の声を確実に集めきり、花尻の眼前にたたきつけることによつて、戦士の長期勾留―弁護士抜き裁判の突破口としての月三回公判の強行をはからんとする花尻のくろくろみをくじくことは十二分に可能である。法廷内闘争においても問題なのは権力と人民の力関係であり、反動司法の横暴を許さない人民の声の高まりを背景とすることによつてはじめて、戦士の奪還、公判闘争の有利な進行をかちとることができるのである。

一〇万署名運動とは、こうしたわれわれの攻勢的、能動的なたたかいとして第一に位置づけられねばならない。

第二には、このたたかいは空港廃港―二期決戦勝利にむけた三里塚闘争の展望をきりひらき、全人民の決起をかちとるたたかひでもあるということである。

まことに管制塔戦士を守りぬくことは三里塚闘争の大義を守りぬくことと同義であり、管制塔裁判闘争の勝利は三里塚廃港闘争の不可欠の構成要素である。

そして、この管制塔戦士保釈要求の署名が一〇万名を越えるという事は、それを数十倍、数百倍する、一億枚にのぼるであろう。紙の弾丸が、北海道から沖縄にいたる全国の職場や学園、地域にブチこまれ、数十万をこえる人々に管制塔—三里塚闘争の意義が訴えかけられることを意味する。署名という一つの具体的で積極的な政治的行為に参加した一〇万名の人々は、管制塔裁判や三里塚闘争の動向、権力の暴虐に注目し、われわれのたたかひを見守る膨大なすそ野となっていくのである。

この巨大な人民運動を実現することが、廃港にむけた勝利の陣形構築でなくてなんであるか。われわれは惜しみなくピラをまき、のどがつぶれるまで署名協力を訴え、靴底をすりへらして人民の奥深くわけり、何としても一〇万署名を達成するのだからねばならない。

第三に、われわれ自身にとってもっとも主體的、戦略的な位置として確認しなければならぬことは、このたたかひが被告奪還・廃港勝利のみならず、八〇年代闘争陣形構築—職場・学園・地域における党と革命勢力の飛躍的拡大にむけた突破口としてあるということである。

改めて確認するまでもなく、一〇万名の数は、これまでのわれわれの現存勢力、活動のパターンによって到底なしとげられる数ではない。しかしながら、これを達成できるならば、われわれの力は飛躍的に増大し、われわれの組織の幅の拡大、一人ひとりの主體的質的強化は必ずやなしとげられるであろう。

激動の八〇年代を目前にして、真に人民の利害を守りぬく革命派としての登場、党の飛躍を実現せねばならぬわれわれにとって、この管制塔人民運動は避けては

おることのできない試練なのだ。その意味でこれは、一個の戦争であり、この戦争にわれわれは何としてもかちきらねばならないのである。

狭く観念的な活動の幅、作風をうち破り、これまで考えも及ばなかったありとあらゆる創意と工夫を發揮し、一年半の長期勾留に耐えてたたかう戦旗派三戦士の闘魂に学び、団結と気運を高めてたかかうならば一〇万署名は必ずできる。事実、九月からの署名運動への突入以降、先進的な「守る会」や地区の同志諸君は、わずか一ヵ月で主體的な署名目標数を達成し、かつてなく大衆的、戦闘的な気運の高まりの中で地区集会の大成功をかちとっているのである。

二月一五日の最終集約の日まで、すべての地区、戦線の諸同志は、綿密かつ大胆な獲得目標、計画性をうちたて、一切のためらいやとまどいをかなぐり捨てて猛

進撃しなければならぬ。最後の力の一しづくまでふりしぼり、一〇万署名の達成—獄中戦士の奪還をなしとげよう！

すべての同志諸君！
今秋期政治決戦における残された任務は文字通り山積みしている。この激闘を力いっぱいいたたかひぬき、「戦争と革命の八〇年代」の幕明けをわれとわが手でたたかひとろう！

朴打倒—日帝放逐をかけて、血みどろの死闘をくりひろげる韓国人民衆にこそ及ばずとも、みずからかえりみて悔いることのない決戦の日々を積みあげよう。

わが党と革命勢力の乾坤一てきの飛躍をかけて、秋期政治決戦の完遂を主體的にいなぬこうではないか！

内乱的危機に突入した韓国情勢

維新体制うち破り 猛進撃する韓国民衆

一〇月一六日、一七日、韓国第二の都市釜山で五〇〇〇から一万人の学生・労働者・市民による暴動が発生した。

一六日午前一〇時、釜山市の学生が集まり、維新体制打倒の集会をひらいたのち、校内デモから街頭デモを敢行、弾圧にのりだした警察・機動隊と投石戦をもって激突したことから戦端はひらかれたのである。

翌一七日も、午前中釜山大近く東萊温泉街で七〇〇人がデモをし、正午から夕方にかけて東大構内に三〇〇〇人の民衆が集まり、午後六時ごろから市内中心部の道路などで集会やデモが続発、まさに解放区の状態が現出したのだ。

一六・一七日のたたかひで学生は、①維新憲法の撤廃、②集会・言論の自由、③学園の外部勢力（KICIA）排除などの従来のスローガンだけではなく、④大統領推薦議員制度の廃止、⑤野党党首の国会除名反対、⑥貧富の格差解消をかけたたたかひであった。

日まで米韓安保協が開かれた。この中で、韓国地上軍の質的強化、米空軍力の韓国周辺への追加配備を骨子とする「第二次韓国軍戦力増強計画」、米韓合同軍事演習、共同防衛体制の強化をめざす連合軍司令部の政策指針が合意された。

ブラウンはその後訪日し、山下防衛庁長官と軍事会談を行った。これをうけて、一月には日韓閣僚会議が強行されようとしてお

り、日米帝による朴擁護、戦争策動はますます露骨に推進されようとしている。

三・一、四・一九をひきつぐ韓国民衆の朴打倒—南北統一への総蜂起は確実に開始されている。

いまこそ日本人民はこの韓国民衆の内乱的決起にちよえて起ちあがらなければならない。

「愛する日本の勤労者、友人たちよ—国境を越えて、われわれの共通の敵に向って力を合わせ、おたがいに助けあおう」という韓国労働者のアピール、在日韓国民衆の「朴打倒への総決起」の呼びかけにちよえ—一月日韓閣僚会議を粉碎し、朴擁護—戦争準備を進める日帝大平打倒の大衆決起実現にむけて奮闘せよ！

このうち、午後八時ごろ、国立釜山大、私立東亜大などの学生五〇〇〇人が釜山市庁舎付近に三々五々結集し、市内目抜き通りを「維新憲法撤廃」などを叫びながらデモを進行した。

これに対して、機動隊は、死者をもだしたといわれるほどの残忍な弾圧を行い、これを見た民衆の怒りが爆発し、約一万人の学生、市民による暴動がまきおこったのだ。

日ごろから民衆に憎まれていた警察署、派出所、市役所、新聞社などが襲撃の対象となり、パトカー一五台、民間放送局の取材車が焼きうちにあうなど、朴の反革命抑圧支配に対する民衆の正義の怒りが爆発したのである。

この日のたたかひは、一〇〇余名の重軽傷者、四〇名の被逮捕者を出しながらも、深夜まで続行され、釜山市警察局長をそのイスから追放したのみならず、文教相や内相までひき出し、直接指揮をとらざるをえない状況をつくりだした。

このことには示されるように今回のたたかひは、YH貿易労働者の坐りこみ闘争への反革命襲撃、新民党総裁・金泳三氏の国会除名といった、朴独裁体制維持のためのなりふりかまわぬ反革命弾圧に対する人民の反撃としてあったのだ。そして、日米帝の経済、軍事力に依存し、韓国民衆を帝国主義に売りわたそうとする策動への、労働・学・市民の怒りの決起であったのだ。したがってこの釜山決起は、九月以来の連続決起をひきつぎ、必ず全国的規模のたたかひへ発展する突破口になるにちがいない。

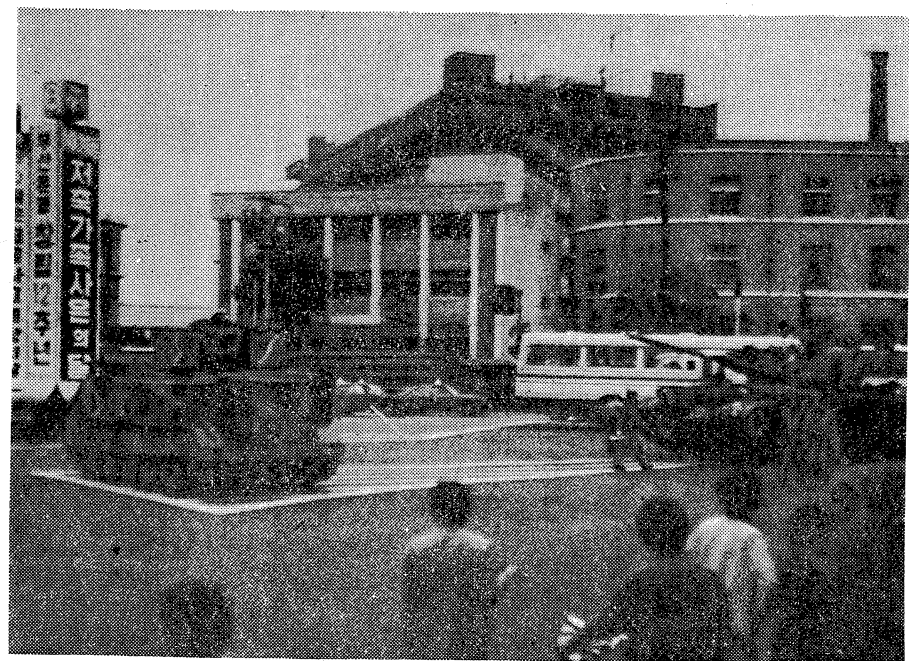
ここにおいて朴独裁は大反撃をくらひ、政権延命の道はますますせばめられた。もはや国民全体を相手にして戦争にうってでるか、北に向けて軍事侵攻するかしかなくなってきている。

ちょうど同じころ、ブラウン米国防長官を迎え、一七日から一九

日までの同僚会議が、残された任務は文字通り山積みしている。この激闘を力いっぱいいたたかひぬき、「戦争と革命の八〇年代」の幕明けをわれとわが手でたたかひとろう！

朴打倒—日帝放逐をかけて、血みどろの死闘をくりひろげる韓国人民衆にこそ及ばずとも、みずからかえりみて悔いることのない決戦の日々を積みあげよう。

わが党と革命勢力の乾坤一てきの飛躍をかけて、秋期政治決戦の完遂を主體的にいなぬこうではないか！



暴動鎮圧のため出動した戦車（戒厳令がしかれた釜山市内 10・18）

10・8学生総決起集会

韓国民衆の新たな決起にこたえる

学共闘の総決起かちとる

すべての同志・友人の皆さん！
一〇月八日、豊島区民センターにおいて、八〇年代朝鮮出兵と対決する学生運動を創出すべく、学生共闘会議主催の学生総決起集会も、都内の学園から多数の結集をもってかちとられた。

司会のあいさつに続き、七〇年を前後する安保闘争の記録映画『怒りをうたえ』の上映のあと、反対同盟のあいさつをうけた。壇上に立った天神峰の石毛常吉さんから、この間の政府・公団の悪質な対話攻撃の中にあっても、空港完全廃港の決意を貫き断固たかろう、そして勝利するという熱意の

こもった発言をうけた。

反対同盟に続き、管制塔戦士山下君の獄中アピールが代読された。山下君は、一年半をこす長期不当勾留をはねのけ、現在も元気でたかっている、ともに八〇年代朝鮮出兵策動をうち破るたたいを創りだそう、と連帯の意を表明した。これに対し、会場全体が熱い拍手で応えていった。そして代読の同志より、現在、全国各地で広げられている管制塔戦士年内保釈奪還の署名・カンパ運動をやりきることにより、獄中の同志に

西城議長より、本集会の基調提起がなされた。ここにおいて、わたし達は今、なげたかろうのか、そして八〇年代を目前にしてわたし達学生に何が要求されているのか、いままさに何をなすべきかについて明確な提起がなされた。「YH貿易の労働者や、結核にむしばまれながらもたたい続けてる金芝河のたたいにたたい、防衛二法改悪阻止・朝鮮出兵阻止の闘争陣形を構築しよう」との任務提起があり、金芝河の三・一アピールをもってしめくられた。

意表明が行われた。
中大の同志は、映年一〇月七日、韓国学生の予告決起にたたい、学内登場をかちとって以来の苦闘をのべ、「進もう、たたいかおう、死のう、そして勝とう、という壮絶な決起をもって今もたたい続けてる韓国の学友に学び、そしてついでいこうではないか。」と力強く訴えた。
発言の最後に大正大の同志は、大正大における移転攻撃、サークル棟破壊を、日帝大平の全社会的再編の中でとらえ、これに対決していこう、侵略反革命戦争への国民動員を何としても阻止しようとのべた。
すべての皆さん！ 先進的学友の皆さん！ 八〇年を前にして、わたし達の任務は明らかである。日帝の朝鮮出兵策動をわたし達学生が先頭になつてうち砕いてゆくうではないか！ ガッチリとスクラムを組み、ともに進もうではないか！

三里塚農民との団結の砦、二期阻止の拠点

現地団結小屋の新建設をかちとろう！



9・16宣言具体化へー 各部落集会開かる

「ここ数カ月反対同盟の葛藤は我らの闘いにとって新たな活力を生み出す希少な時であった」
一九・一六集会で反対同盟は四年間のたたいをへ、廃港にむけた巨大な地歩を固めた。
今、九・一六の四項目提案をうけ、その深化、具体化を目指し各地で部落集会がもたれている。九月二六日、千代田学区集会ももたれた。

だ「九・一六、四項目の提案をいたしました」で、それで終らせちゃだめだよな」
青行隊は訴える。「反対同盟に関わるあらゆる問題を同盟総体がうけとめ、たたいをともにするに力を加えて、生活・農業面において力を合わせ反対同盟の団結の質を具体的作業を通して絶えまなく高めあおう」(青行隊通信第四号)
たたいの根をのびのびと伸ばし、三里塚は強く大きく廃港への胎動を開始している。

「農民魂にふれた」 全国援農隊三里塚へ

「岩山の防音事業とか、一年間連日の政府攻撃といっても、なかなかむずかしいんじゃないか」
「いや、それをやりきっていいんが今の同盟に問われてるんだっぺ」
「対話の問題はいわば反対同盟がなめられてんだよ。廃港たって待っててくるもんじゃない。攻勢的に連月連日の闘いをやりきっていく中に、二期をやらせないような体制と闘いをつくってゆかなきゃだめ

九一〇月対話攻撃はねかえし、たたい反対同盟との団結と廃港決戦の決意をうち固めんと、全国から援農隊がやってきた。
イネかり、ゴボウほり等「収穫競争」の最中、「正直いってきつかった」(学生S君)、「なまっただ体にはきついが」(名古屋U

決意新たに廃港への 拠点をつくらう！

「九・一六集会でどう思いましたか？」
「対話の問題、やはり同盟もたいへんだったよな。だからこそ九・一六はそれを自分達からうち破っていく大きな端初として意義があったと思うだよ」
「四項目の提案は？」
「いろいろむずかしい面もあったけど、対話はねかえしていきという大前提にたたいやっていくことが大切じゃないか」
議論に熱中して夜中の一二時をすぎたのを忘れた仲間もいた。

われら現闘団は、九・一六集会以二期阻止・廃港への砦として団結小屋を新築することをうちだした。鉄塔決戦、開港阻止決戦を経て、第三一団結小屋も三年余の月日がたつた。いま、九・一六集会で新たな地歩をふみだした反対同盟とともにわれ

さんがと苦闘、奮闘しつつも、「だけどうした仕事や生活が一三年のたたいの質を作っているのではないか」と思った」と集會、闘争では見えないもう一つの三里塚を見つめる。
一ぶくや、夕食時などに昼間の疲れも忘れて討論が巻き起こる。「九・一六集會どう思いましたか？」
「対話の問題、やはり同盟もたいへんだったよな。だからこそ九・一六はそれを自分達からうち破っていく大きな端初として意義があったと思うだよ」
「四項目の提案は？」
「いろいろむずかしい面もあったけど、対話はねかえしていきという大前提にたたいやっていくことが大切じゃないか」
議論に熱中して夜中の一二時をすぎたのを忘れた仲間もいた。

らが「城」を新らしく、大きくつくり、大きく廃港にむけたたたいの陣形を整えよう。
新団結小屋は現地初の三階建てである。要塞建設、木の根用水等の経験とくふうをこらしつつ自分達で設計し、鉄骨の加工等準備もはじまった。本工事も近々着手する予定である。
「あらゆる困難、難関はねのけ四項目具体化しよう！」という反対同盟のたたいに学び、われわれもあらゆる困難、妨害をはねのけ団結小屋の新築をかちとろう！ 全国から建設隊を！ 全国から建設物資を！

3・26戦闘精神受けつぎ 保釈10万署名に絶対勝利しよう

水の・さとう君を守る会

『水の・さとう君を守る会』は、一〇〇〇名署名突破をふまえて、新たに四〇〇〇名署名を目標に掲げました。

一月下旬、初公判と時を同じくして活動を始めてから、はや一〇カ月が過ぎました。花尻裁判長は、相も変わらず月三回公判に固執し、被告は今だに獄中に囚われたままです。

必勝の信念で!

私達はこれまで、花尻の訴訟指揮や被告の仲間達が困難な中でたかひぬいっている現実を前にしながら、決して充分な活動をしえませんでした。

「いかにして会の活性化を創り出すのか?」という討論は六月から二ヵ月にもわたって行われました。

そして一つの結論に達しました。「守る会の原点にたち帰ろう!」というのがそれです。原点とは何か。それは三・二六戦闘—管制塔

占拠の中に示された思想性であり、勇敢さであり、必勝の確信であり、その他一切のものであること。

そしてそれを体現した水野君のたかひ、原点とはそれ以外ではない。それにあくまで拘泥しつづけ、発展させていく、これが私達の任務なのだということ。

水野君や佐藤君を守るといふことは、とりもなおさず、私達一人ひとりの内実が問われることなのです。連帯、支援などと言って遠くから手を振って見せるだけでは何の意味もありません。問題なのは私達自身がどうするかということなのです。

われわれがやらずして誰が奪還するのか

管制塔戦士達は「正直いって、できるものとはどうい思えなかつた」というたかひを、あらゆる困難をのりこえて実現しぬいたのであり、水野君は「誰かがやらなければならなかつた。だから私がやった」と父親に語りかけている。

権力の「対話」攻撃の下で熱田誠さんは、「三里塚は、日本の労働運動が越えられぬ限界を幾度も突破してきた。勝利の確信は三里塚—三年のたかひの中にこそある」と語っているが、管制塔戦士のたかひは、まさに三里塚魂に通じるものなのです。

「一〇万人署名など、ほんとうにとることが出来るのか」という気持でいた私達は、この三・二六

人民の力を結集し、 獄中戦士を奪還せよ

保釈奪還をかちとり、「航空危険罪」のデッチあげをうち破ろう

山下 和生

全国でたたかう同志・友人の皆さんへ、年内奪還にむけた署名・カンパ運動のさらなる発展を訴えます。

現在、管制塔裁判は「航空危険罪」が焦点となっており、具体的な危険の存否をめぐってたたかわれています。そうした裁判の山場、重要環に突入している今、「月三回指定」攻撃の中で検察側のデッチあげを崩していくことは少なからず困難を伴い、不十分なところもでてきています。

こうしたことをうち破るには、保釈をかちとることが何よりであると思えますし、勝利のカギであるといつてよいと思えます。

この間、検察側は管制官・管制部長等を証人としてたて立証せんとしてきましたが、弁護人の奮闘により、逆にデッチあげ粉砕の糸口をかちとりました。検察側の動

揺を招くところまで成果をえ、ここにきてさらなる攻勢で勝利をめざしていききたいものです。それにはやはり保釈による反証

人民の総力をあげて裁判所を追いつつ保釈をもぎ取ろう!

水野 隆将

全国の同志・友人の皆さん! 三・二六管制塔占拠のたかひから一年半が経過し、獄中では二度目の秋が訪れました。

権力は、三・二六闘争を最先頭で闘いぬいた私達に対して、その階級的憎悪と政治的報復の意味を込めて不当にも長期勾留を強制し、私達はこの冬も獄中生活を余儀なくされようとしています。

活動のパワーアップ! これが何よりも必要だと思えます。

三・二六闘争は、まさに三里塚の利害をあらゆる犠牲をはらって守りぬく決意を、支配階級に突きつけたものといえます。それゆえに敵は、東京地検・東京地裁を先兵として、裁判に名を借りた階級的報復をわれわれにかけてきてるのである。

そして何よりも三里塚闘争=悪

精神をわがものとし、「われわれが戦士を奪還せずして、一体、誰が奪還するのか」と問いかえすことによって一〇万人署名達成への決意を固めてきました。

そして、私達は、職場・街頭情宣、文化人まわり、団地まわりなど一軒一軒しらみつぶしに署名用紙を、必ずいつも署名用紙をたずさえ、職場への行き帰り、そして少しでも時間があれば、一人で、街頭でたった一〇分でも二〇分でも署名をとるといような活動を行ってきました。

多くの人々に協力を求める中で、私達は次のような確信を深めることができました。

それは、私達が全力をつくして訴え、真剣に、真面目に訴えかけていくならば、心ある人は必ず力をかしてくれようということです。

このようにして『守る会』としての目標、署名一〇〇〇名を達成した私達は、先にも述べましたが、新たに四〇〇〇名を目標に掲げました。一〇万人という大目標からくらべたら、微々たるものなのですが、必ずこれをやりぬく決意です。

「弁護士抜き法案」制定をめぐる「法曹三者合意」のように、司法の反動化をますます強め、この「合意」を盾にとつて「月三回指定」攻撃をかけてきたものであり、管制塔裁判のたかひは、全人民的利害にもかかわる性質を帯びています。

全国の同志・友人の皆さん! さらなる攻勢と勝利をめざし、一〇万人署名・カンパを心から訴えます。われわれ被告団もいかなる困難があろうと奮闘しぬく決意であります。

管制塔裁判においても、検察は三・二六闘争によって航空の危険など生じていないにもかかわらず、「航空危険罪」をデッチあげようとしており、また裁判所もそれに応える形で早期実刑攻撃をますます強め、一〇月一日には早くも来年一年分の月三回指定を行ってきました。

花尻裁判長は「管制塔グループは重罪犯だからそう簡単に保釈する訳にはいかない」などという暴言を吐き、あくまでも私達が権力

にひれ伏し、三・二六闘争の意義を放棄しなければ獄外に出さない事をほのめかしています。しかしながら同志・友人の皆さん。いったい誰が彼らに頭を下げるというのでしょうか。

人民の苦渋の上にアグラをかき、労働者、農民の血叫びをせせら笑うような奴らに下げる頭を私は持ちません。

それゆえ私がここから出る唯一の方法は、広範な労働者人民の総力をあげたたたかいによって裁判所を追いつめ、保釈をもぎとっていく以外にありません。

全国の同志・友人の皆さん。一〇万人署名の完遂を！最後の勝利まで共にがんばりましょう。

九・一六宣言にみる勝利の確信をあらゆる闘いにおし広げよう

佐藤一郎

深まりゆく秋の気配が獄中にも感じられる今日この頃ですが、同時に多くの同志友人のみなさんの管制塔戦士年内保釈へ向けた力強い闘いの息吹が厚い獄壁をつらぬいて伝わってきます。

思えばあの三・二六の闘いによって日帝・政府・公団の開港策動がもの見事に阻止されたときに、私達の中にはある確信が生みだされました。

それは権力の横暴は私達人民の力で必ず打ち破ることができるということ。しかしそれは五・二〇「開港」を許してしまったという意味においてははまだまだよつとした確信にとどまっています。にもかかわらず九・一六に示された反対同盟のより強固な団結のうち固めと一貫してつらぬかれていく闘魂と、対話攻撃粉砕の高らかな宣言、そして多くの全国で闘う人民の結集の中でその確信はやはり確実なもの

となりつつあります。そのような確信を三里塚闘争のみならず、狭山・沖繩・日韓・反原発・労働運動とあらゆる闘いの中で開花させ、八〇年代へと延命せんとする日帝・大平の侵略反革命戦争へ向けた国民動員と対決する戦闘的な陣形を創り出しましょう。

そのような闘いはより根源的な鋭さともち、かつ大衆的な拡がりをも有した闘いでなければなりません。そのことを確認しつつ、管制塔戦士年内保釈をかちとる闘いを勝利的にうちぬいて下さい。

管制塔裁判はますます航空危険罪のデッチあげと権力の報復的弾圧の姿が暴露されてきています。全ての皆さん共に勝利の日までがんばりましょう。

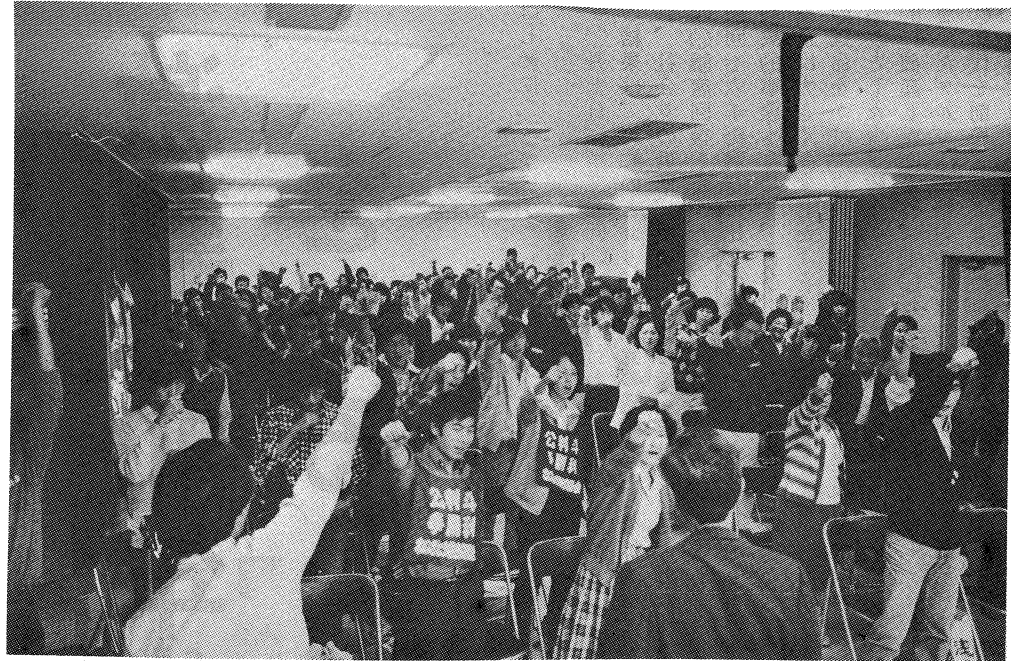
埼玉 10・7集会に一五〇名

獄中戦士にこたえ、署名達成に向けて意気あがる

「水野君と佐藤君を奪い返せ！」その一点に意志を結集させ、われわれは全力をふりしぼって一〇・七集会を準備した。県警の弾圧をはね返して、通算二〇回、一万三〇〇〇枚のビラまきと二〇カ所五〇〇〇枚のステはりがやりぬかれ、眠る暇も惜しんで訴えに飛び回った。

風雨をつき一五〇名が結集 一〇月七日、おりからの台風の中、上福岡市コミュニティーセンターには傘をさし、レインコートから水をしたたらせて一五〇名の人々が続々と結集したのである。文字通り老人から子供まで各層にわたる顔ぶれが会場を埋めつくす中で、集会実行委を代表して岩木英二氏(上福岡市民連合)は「きょうの主催者はここに集まられた皆さんのだ」と挨拶を述べ、続くものべながおき氏(管制塔裁判を勝利させる会世話人)は、「花尻君という裁判長は裁判の進行などは全然気にしていない。もっぱら真四角の顔で傍聴席を睨みまわし、全員退廷にするのが最高の生き甲斐だ。あんなものは裁判ではない」と無法な管制塔裁判を弾劾し、法や民主主義は「武装した労働者が創りあげる以外にない」と訴えた。四〇分にわたる氏の講演が拍手の中で終ると、いよいよ「大義の春」の上映である。真白なスクリーンにあの三・二六が生々しく再現されていく。

広範な結集かちとり、廃港勝利・署名達成を誓う (10・7上福岡コミュニティーセンター)



赤ヘル部隊を満載してゲートを突破するトラック、権力の実弾乱射にもひるまずくりかえされる突撃、倒れた同志の首めがけて打ちおろされるジュラルミンの盾。管制機器にハンマーが力の限り叩きつけられ、水野同志の笑顔が映しだされる。

家族との固いスクラムで年内奪還をかちとれ!

果敢なたたかいに熱烈な拍手がおくられた。壇上には五・二〇被告の松本節子さんがカンパピールに立ち、一言一言かみしめるように獄中に残る同志の奪還を訴える。会場ではたちまち六〇万円近いカンパが

ここで司会の紹介をうけて水野君の御両親と佐藤君の妻・奈津子さんが登壇、かわるがわるマイクを握る。「明治の諺に『大義親を滅す』というのがある。大義の前に親は滅せられちゃったんです。しかしね、私はただ敗けてるわけじゃありません。同志のひとりとして一緒にたたかっていく決意です！」という水野君のお父さんの言葉に割れんばかりの拍手が鳴り続けた。

全精力を傾け10万人署名をかちとろう!

発言者の最後に決意表明にたった「守る会」の同志は「誰かがやらねばならなかった。だから私がやった。という水野精神をわがものとし、守る会が奪還せずして誰が奪還するのかと問いたたかひぬくと力強く宣言し、これをうけて司会の同志は「獄中の彼らと違い、私達は自由だ。いつでも逃げられる。だからこそ逃げてはならない。ともにたたかいていきましょう！」としめくくった。

われわれは、かつてない広範な結集をかちとったこの集会の大きな成果をうち固め、何より集会を組織する過程でつちかわれた積極性と主体性を堅持し、年内保釈実現めざして進撃していきたい。

激動の80年代政治危機 をしるした79年総選挙

はじめに

一〇月七日、第三五回総選挙が行われた。その結果は、周知のとおり、自民党の過半数割れ、社会党の低落、中道の現状維持、日共の四〇議席回復となった。

前回七六年総選挙に比して、新自由クラブの壊滅的事態も含めて、再び、日本の政治支配構造は大きく激変した。とりわけ、八〇年代の延命をかけて自民党単独支配の再建をはかるうとした大平政権の反動的もくろみが決定的に破産したことは、七〇年代後半からはじまったブルジョア権力の崩壊のきしみが、八〇年代を前により大きな激動へと拡大していく以外ではないことを鮮明に映し出したのである。

七五年ベトナム・インドシナ人民の勝利、そして今年のイラン、ニカラグア人民の勝利

一、大平による「安定多数獲得」——単独強権支配のもくろみがうち砕かれた

八〇年代反動総攻撃の第一歩をねらった大平の強行解散

九月七日、大平は野党や自民党の非主流派（福田、三木・中曾根）の反対をおしきって衆議院を解散し、総選挙にいざなう。

この大平の解散攻撃に対して、野党は「多数支配をねらう党利党略」、「増税かくし、汚職かくし」として批判した。また、三木前首相は、「最近の大平首相の政治姿勢は権力の論理におぼれ思いつているふしがある。大平首相は先の総裁選で福田政権を権力志向型と批判したのだから、首相も政治姿勢を再考すべきだ」として大平の「ハト派」からの変身をなじった。

しかし、今回の総選挙は「増税かくし」や大平の権力志向にとどまらないきわめて重大な反動的もくろみをもってなされたものであることをまずはじめに見ておかなければならない。

「われわれは八〇年代への曲り角に立っている」「現在の難局をのり切るために、政治における人心一新が必要」「安定多数で力を」。こうした大平の総選挙への意気込みは、単に増税問題に限らず、八〇年代へのブルジョア支配への延命をかけた、かつてない大きな反動攻勢のもくろみを背景にしていたからに他ならない。隠していたのは増税だけではないのだ。

こんにちの日本帝国主義が直面している政

へと広がっている第三世界人民の進撃が、帝国主義諸国の存立を根底からゆさぶっているのであり、日本のブルジョア支配の不安定さの拡大もこのことよってつくり出されている。したがって、自民党をはじめ、中道勢力はもとより、社会党・共産党の既成革新にあっても、いずれも現代において安定した政治勢力としてありつづけることができない。

まさに、七〇年代から八〇年代への歴史的結節点においてなされた今回の総選挙は、日本の政治支配構造の根底的な不安定さをさらけ出したものである。それは、明らかに八〇年代政治危機のかつてない深まりを予言している。ここに、今回の総選挙での各政治勢力の現状と動向を見ていくことの中で、八〇年代政治危機の深化の現局面を明らかにしていきたい。

治・経済的危機は、まず朝鮮やアジア・中南米・中東の新植民地主義的支配の危機、そして欧米との経済摩擦や通貨不安、原油をはじめとした資源供給不安など、いずれもブルジョア共の生命を脅かす重大なものである。この危機の打開策をなすものとして、支配者共は、八〇年代の国会で様々の反動法案を成立させようとしている。

すなわち、防衛二法、労基法、教育基本法、農地法、弁護士法など戦後日本の政治・経済・教育・司法の枠組をなしてきたこれらの基本的制度の抜本的改悪をねらっているのであり、いずれも各省庁や内閣直属の審議会、自民党内で、現在検討が進められている。そしてこの反動法案成立の頂点には、憲法改悪という自民党の積年の悲願達成がある。

このようにみるならば、大平による「安定多数」をねらった今回の総選挙が、何をめざしたものであるかは明白である。

「自民党の安定多数」はブルジョア共にとっ



「安定多数」の夢をうち砕かれ、苦悶する大平

て、八〇年代の延命に道をひらく護身符に他ならず、人民にとっては、増税と合理化、原子力・空港の巨大開発、自作農の切り捨て、差別と排外主義的教育のおしつけ、働くこと・生きることの権利の抑制によって、戦争への国民総動員を強制するかつてない反動の道をひらくことを意味するものであった。

この反動の道をひらく第一歩として今回の総選挙はあった。大平の強行解散—総選挙がかかる八〇年代の延命をかけた総反動攻勢の突破口をなすものであったこと、この階級的位置をまず確認しておくのでなければならぬ。

自民党庄勝の夢を人民の反撃が打ち砕いた
大平・日帝ブルジョアジーによる八〇年代への総反動攻勢の第一歩をめぐらした総選挙結果は、この敵の鼻に痛撃を与えた。
大平がこの時期に総選挙を仕かけたのは、周到な計算によるものであった。まず、昨年の中間地方選から今春統一地方選で、京都、横浜、沖縄、東京、大阪と革新自治体を軒なみくつがえす勝利をおさめ、社・共の背反と低迷状況がつくり出されていた。さらに、七月、新自由クラブの西岡幹事長の離党が大平らによる工作によって実現し、野党の混迷を一層深めさせることに効を奏していた。他方で、今年初頭からの卸売物価指数の急激な高騰の中で、OPEC原油値上げの影響が、暮から来年にかけてインフレ再燃の兆しをみせており、来年度の参院選を前にして、大平は総選挙の好機は今秋以外ないと判断したのである。

こうした情勢判断の下で、自民党は「二七

第1表 政党別の得票数・率・議席数

	今 回			前 回 (76年)			前々回 (72年)	
	得票数	得票率	議席	得票数	得票率	議席	得票率	議席×
自 民	24,084,127	44.6	248	23,653,624	41.8	249	46.8	265
社 会	10,643,448	19.7	107	11,713,005	20.7	123	21.9	112
共 産	5,625,526	10.4	39	5,878,192	10.4	17	10.5	39
公 明	5,282,682	9.8	57	6,177,300	10.9	55	8.5	30
民 社	3,663,691	6.8	35	3,554,075	6.3	29	7.0	19
新自ク	1,631,811	3.0	4	2,363,984	4.1	17		5
社民連	368,660	0.7	2					
無所属	2,641,063	4.9	19	3,227,462	5.7	21		4
計	54,010,108	100.0	511	56,612,755	100.0	511	100.0	474

×は前回解散時の議席数

一の安定多数はおろか二八〇もといきおひ込み、田中角栄など「三〇〇議席も可能」と豪語し、うろたえる野党を尻目に、自民圧勝をマスコミも断言していたのである。

しかし、結果は定数五一一の過半数二五六をさらに下回る二四八議席という最底の惨敗を喫した。これは前回七六年の総選挙で、ロッキード事件と、挙党協力の「三木おろし」による分裂選挙で、保守合同以来はじめての過半数割れ二四九という結果よりもさらに下回っている。元衆議院議長の前尾繁三郎をはじめ閣僚経験者の大モノが続々落選した。「(三里塚で)対話を進めています」とふれ回った千葉二区の大幹も落ちた。田中・福田・三木も前回より得票を減らした。

公明党が前回よりも候補者を二〇名も減らし、新自クの壊滅、公民協力で大量の中間浮動票が自民党に流れ、得票率こそ前回の四一・六〇から四四・六〇とのばしたものの、自民単独支配の実現をかけた大平のもくろみは、完全に破産させられたのである。

大平の目算違いは、統一地方選の勝利が、公・民や社会党までも巻きこんでの勝利でしかなかったものを、自民党一保守復調としてとらえ、逆に中道四党の結束をつくり出してしまったことによるものである。しかし、より根底的には、「数々の誤りを犯した自民党ではあります、優れた見識と人材をもってゐるのは、わが党の他にはありません」という大平・自民党政権の腐敗の居直りと、反動政治に対する人民の怒りと反撃を見てとることができなかったことにある。

大平は「〇名の保守系無所属を追加公認して、総数二五八とさううして過半数を維持することとした。しかし、これでも国会の常任委員会一六のうち、野党が多数をしめる逆転委員会は前以上困難なものとなったのである。こうして、七〇年代において、一〇年間に佐藤・田中・三木・福田・大平と実に二年ごとの政権交代、国会での与野党伯仲という政治的流動性、不安定さは、今回の総選挙において、なお一層の動揺をつくり出すこととなったのである。

政治危機に拍車をかける自民党内抗争

自民党の過半数割れによる国会運営の流動化の拡大と同時に、今回の総選挙は、さらに自民党内の派閥対立をかつてなく激化させるものとしてあった。

大平は、自らの手で総選挙を行うべく、昨年一月の総裁選後、「総裁派閥からは幹事長を出さない」というこれまでの党内合意をふみにじって自派の斉藤邦吉を幹事長として、選挙のさい配をふるった。その結果、大平派は新人一四人を当選させ、それまで党内第四位一三五名の中派閥から、一躍五二名の最大派閥にのし上がった。また、連携している田中派も三名増の四七名となり、逆に福田派・中曾根派・三木派はいずれも現有勢力を減らす結果となった。

こうした大平による露骨な派閥がらみの選挙をなすことによって、昨年総裁選以来の大平・田中の主流派と、福田・中曾根・三木の非主流派の対立は、決定的に根深いものとなったのである。しかも、自民党は、これまで派閥対立を長老と中間派の調停によって解決してきたが、この伝統的な党内調停構造が、最近の保利・船田中・椎名ら長老の相次ぐ死去、そしてこれによる中間派の事実上の消滅で、完全に失われてしまったのである。

したがって、自民党は派閥対立を一層深刻なものとしたまま、当面の特別国会での首班

二、「選挙協力」でようやく現状を維持した 中道の存続は、日帝・大平の延命に道をひらくのみ

中道の延命をかけた背水の陣―選挙協力

今回の総選挙で、中道四党―民社・公明・新自由クラブ・社民連―は、解散必死の情勢の下で、八月一日、「四党アビール」をまとめ、「現状の打破」と「新しい政治の時代」をめざして選挙協力を宣言した。

この種の選挙協力は、前回七六年総選挙でも、公・民の間で部分的にもたれたが、今回のそれはこれまでになく広範囲なものであった。

四党統一候補二名、一党の候補を三党で推す四党協力候補が八名、公明候補に民社が協力したのが一二名、民社候補に公明が協力したのが一〇名、総数三二選挙区で選挙協力が行われたのである(第二表参照)。

こうした中道四党のきわめて広範な選挙協力の実現は、七六年以来の中道諸党の動きと

指名に向けた挙党体制づくり、さらには年末までの五年度予算案づくり、来夏の参院選への体制固め、そして来年暮の総裁選と大きな山場を次々と迎えることになり、不安と動揺に満ちたこんにちのブルジョア支配の危機を、決定的に拡大させるはめに追いこまれているのである。

まさに今回の総選挙は、大平の思惑であった、「自民党の安定支配」の夢を打ち砕き、自民党支配の内外にわたる危機をかつてないほど根底的なものとし、八〇年代政治危機を、その中核体としての自民党に、はつきりと刻印したのである。

たしかに、この危機は、自民党の議席の減少、国会運営の混乱、自民党内対立の激化によって、ブルジョア支配者共の意志決定の不安定さを拡大したことにとどまるものである。それは、増税策をはじめとした人民への犠牲の転嫁を阻止させるものではなく、戦争への道を断念させるに足るものでは決してない。しかし、明らかに敵の足もとにはふらついていのだ。

われわれは、かかる自民党支配の危機が、たたかすすべての人民にとって一層有利な情勢をひらいていられることをはつきりとうけとめなければならぬ。そして、八〇年代階級闘争の勝利を導く決定的打撃を、全人民の決起でつくり出すことによって、人民の手で引導をわたしてやろうではないか。

密接な関連をもっている。

前回七六年総選挙は、自民・社会・共産が議席を大きく減らし、かわって、公明・民社・新自クが総数五四から一〇一と議席を倍増させた。ロッキード批判で自民党をとび出し新党を結成(七六年六月)したばかりの新自クの「ブーム」もあって、「中道の時代」が唱われた選挙でもあった。

この背景には、社会党江田派・公明党・民社党を中心とした「新しい日本を考える会」(会長・松前重義)の結成による保守・中道連合政権構想の動きがくり出されてきた。ロッキード疑獄に動揺した自民党の単独支配が崩れかかっていたこの時期、中間勢力結集によるブルジョア支配の補強がもくろまれていたのだ。この動きは、その後、七七年社会党右派の田英夫らの新党―社民連結成をひき起こし、昨年中間地方選から今春統一地方選

中道政党関係

中道四党統一 (2選挙区)	2勝0敗
山形1 渡部正郎	無新
山形5 近藤豊	無新
中道四党協力 (8選挙区)	5勝3敗
山形4 森田景一郎	公新
山形4 及川順貞	公新
山形1 小下敬之助	民新
山形2 木村守男	民新
山形1 石原健太郎	民新
山形2 阿部昭之助	民新
山形1 阿部昭之助	民新
公民協力 (12選挙区)	10勝2敗
青森1 寺見宏明	公前
青森2 宮地正英	公前
青森3 山田英介	公前
青森4 吉浦忠次	公前
青森3 小伏新修	公前
青森4 新井彬一	公前
青森1 坂井弘一	公前
青森1 平石磨作	公前
青森4 岡鍛冶	公前
青森1 瀬野栄次郎	公前
公民協力 (10選挙区)	4勝6敗
福島2 滝田幸助	民新
福島5 和田一仁	民新
福島5 河村文雄	民新
福島2 横手村勝喜	民新
福島3 前山茂	民新
福島2 島田野郎	民新
福島1 保野隆	民新
福島1 米沢隆	民新
公民協力関係 (2選挙区)	2勝0敗
公明一全通協力	社前
鳥取2 武部文	公新
山口2 吉井光照	公新

第2表 政党間の選挙協力

にかけて自民・中道連合での一定の勝利をつくり出してきた(京都・大阪・東京・沖縄など)。

しかし同時に、こうした中間勢力の保守接近は、人民の離反を生み出してきた。地方選における中道諸党の得票数の低下、そして公明党・創価学会の内部分裂、さらに新自くの分解が中道の危機をあらわにした。

公明党の母体・創価学会は、宗門である日蓮正宗の総本山石山寺との間で、学会が教義をゆがめたこと、あるいは「御本存(日蓮の肖像)を勝手につくったことなどでこの二年間内紛をくり返し、ついに池田会長の辞任までひきおこした。さらに、学会が会員から多額の「御供養金」を集めて、これを不動産購入の投機資金にしていたことが暴露され、怒った学会員四一四名が、この「御供養金」の返済を求めて学会を告訴(一〇月一日訴状を東京地裁に提出)。また、「池田会長言行録」として、元会員が池田の暴言の暴露をはかり、この出版をめぐる告訴が行なわれるなど、「清潔」を売り物にしてきた公明党・創価学会のバケの皮をひんむく事態が次々に起こっているのである。

当然にも、こうした事態は学会員の相次ぐ脱落を生み出し、その数は五万を越えたとはいわれている。そして、このことによって、公明党の集票基盤もまた大きく落ち込みはじめたのである。

新自由クラブでは、この九月、西岡幹事長をはじめ大成正雄ら四名が脱党した。この分裂は、河野洋平らの「保守新党」路線による中道との連合という方向と、「自民党刷新」をあくまでめざし、時機を見て自民に復帰する西岡の方向という、結党当初からの相違が大平らによる隠然とした分断工作によって表面化したものである。

新自くはこれで、長崎・三重など六県連の解散、四万の党員が分裂後一万八千に激減、更に有田一寿ら参院のメンバー全員が離党し、参院での会派を解散するなど、政党としての存続すら危うい状態となった。

また「民社党」も、委員長であった春日一幸が、勝共連合・朴一味と密接な関係をもちすぎ、その黒い癒着が暴露されそうになり、あわてて昨年、春日を勇退させ、佐々木を委員長にすえて党のイメージ・チェンジをはかったのである。

こうして中道諸党は、「新しい政治」の装いの中身が、自民党と大差ない汚さであり、その政治路線も、有事立法のあと押しをはかったり、元号法案に賛成するなど、「第二自民党」としての本質が明白とされてきたのである。

自派の落ち込みを見越して、立候補を前回より二〇名減らした公明党の竹入委員長は、いみじくも選挙を前にして、「四党協力の背水の陣をしいた今回は、何としても勝たなければならぬ」と悲痛な叫びをあげていた。

かかるものとして、今回の中道四党の選挙協力は、何よりも人民からの離反、頭打ちの危機的事態をのりきる自己保身のためにつくり出されたものであることが見てとられなければならぬのだ。

今回の選挙において、社民連などは、いずれも選挙協力によってかろうじて延命したし、伸びたといわれる民社党も公明党の協力によるところが大きい。そして、総体として、得票率を前回二一・三%から二〇・三%とおと

しながらも、議席の上で中道無所属を含めて一〇一議席としたのである。

まさに、中道においては、かろうじて、選挙協力によって前回の勢力を維持しえたのだといえるのである。

中道のもくろみは、政権参加と労戦の右翼的統一による「救国連合戦線」

では今回の選挙協力によって現状を維持した中道勢力は、日本の政治支配の構造にどのような意味をもたらすのか。

彼らはいま、選挙協力の予想を上回る成果を見て、結束を一層深めようとしており、来年夏の参院選での協力で、社会党をけおとして野党第一党の勢力にのしかかろうとしている。

しかし、そこで彼らがかろうじているのは、日帝ブルジョアジー・自民党との対決では決してない。自民党単独支配を崩すことによって、保守・中道の連立政権を成立させることこそが彼らの目的である。

とりわけ、この中道勢力の政治的カナメとなっている民社党は、七六年の自民党分裂をとらえて、一部の保守との連合を言い出し、さらに、「反対するだけの野党はダメ」という「責任野党」論を打ち上げ(七八年)、「政策中心の連合」(七九年)として、①安定成長の明確化、②地方の時代の推進、③自衛隊と安保体制への現実的対応、④原子力・代替エネルギー開発、といった政策を「連合政権の最低合意」として掲げたのである。

そして、「雇用確保のため」と称して、PX LやFXの国産化、航空母艦の保有、防衛費のGNP一%の枠の撤廃など、軍需産業化を主張し、空港・原発・石油基地(OTS)建設に反対するのは「地域的集团的エゴイズム」だとのしり、「利己的な欲求を正当な権利主張と混同したり、福祉の増進を要求しながら適正な負担を拒もうとする一部国民の意識は憂うべきもの」と、たまたかう人民への公然とした敵対の立場をあらさまに示してきたのである。

かかる民社党・同盟・JOの政治姿勢は、「公明も民社も保守政党だ」と新自くの河野が西岡に反論して、公民共闘への参加を主張したことに示されるように、保守そのものである。

そしてかかる政治的内実の下で、最近の地方選での自民党との共闘、国会においてブルジョアジーの政策の根幹をなす予算案へ、一

三、混迷する社会党の中道への傾斜と選挙党へ純化する共産党

「安保廃棄」をおろし、中道に追隨する社会党

社会党は、今回、議席数でこそ六九年総選挙の一〇〇の大台割れはまぬがれたものの、前回の一二三から一〇七となり、得票率では、結党以来の最低、二〇%を割る一九・七%しかとれず完全な低落状況を呈した。

社会党本部は、この結果を「野党第一党の体面を保ちえた」として肯定しているが、その低迷はぬぐいがたいものがある。それは、

部修正とひきかえに賛成投票をするなど、絶対多数を失った自民党を支え、その危機を補修してきたのである。とりわけ、今年の予算案に対して、公明・民社は賛成の見返りとして、大平内閣への入閣をもち出したという。

「竹入は厚相、佐々木は労相をやりたいなんというんだよ。これは大変なことだよ(大平)」。また、この総選挙で、公明党都議議員の一人は、「この選挙にかちますと、おそらく竹入委員長が副総理大臣になるのではないか、乞う御期待です」と都内の演説会で公然と言いつつ、放っているのである。

さらに、選挙後、民社の塚本書記長は、「自民党が過半数を割って混乱することはない。謙虚になればスムーズに行く。そのため協力したい」「自民党の提案にことごとく反対すれば、かえって国民は困ることになる」と自民党との協力を憶面もなく語っている。

まさに中道にとって、自分達の勢力が拡大し、自民党が過半数割れをすることは、自らも政権の座に連座できる可能性が大きくなった、大臣になれるかもしれない、という権力欲の実現以外の何ものをも意味しないのだ。そして、この中道勢力の八〇年代に向けた現状勢力の維持は、かつてない政治危機におちいり、うろたえる日帝ブルジョアジーと自民党のその危機を救済し、延命を助けるだけのきわめて反動的な役割を果すのみである。

しかも、労働戦線における右翼の再編をめざす同盟・JOは、この中道勢力の確保に力を得て、労戦統一の積極的展開をうち出しているのである。

「幸い中道勢力が伸びてきている。昔のように、与野党がオール・オア・ナッシングでなくなっており、野党にも話のわかる人がたくさんいるから、政党を越えて政治運営することを期待したい(日商会頭永野)。

このようなブルジョアジーの「期待」をうけて、中道勢力は、戦争による危機のりきりをめざす日本帝国主義の総路線と歩調を合わせて、「危機に立つ日本―救国連合戦線に結集しよう(春日一幸)」というスローガンの下で、八〇年代へ向けた戦争への国民総動員の大きな一翼を担おうとしているのである。

われわれは、この中道四党の悪らつきわまらぬ反動性・反人民性を徹底してあげき出し、この資本に買収された本工プロレタリア、危機感にかられて自己保身をはかる小ブルジョア共の腐りきったブルジョア的価値観を内在的に突き破る人民の革命的決起をつくり出すのでなければならない。

直接的には、この間の地方選におけるフラつき、つまり京都・大阪・横浜での保守・中道との連合、他方での日共との連合(東京)というあいまいさに帰因している。しかし、より本質的には、社会党のこれまでのあり方そのものの重大な転換の岐路に立たされていることによる。社会党は、五〇年代後半から一〇年間、自民党対社会党の保革二大政党の時代の中で、社会党自身のゴツタ煮的構造を維持してきた。それは、ソ連派寄りの正統マルクス・レーニン主義を語る社会主義協会、ヨ

ローパ流の社民主義をめざす江田派や新しい流れの会、あるいは、親中国派の佐々木派（社会主義研究会）や全日農を基盤とする農民同志会など様々の色あいを内部にもちながら、「唯一の革新」のベールに包まれて、その矛盾をおし隠してきたのである。しかも八〇〇万組織労働者を有していた総評の社会党一党支持の強固な組織的支えがあった。

しかし、八〇年代を目前にして、この構造は完全に崩れ去ろうとしている。

公・民による左からのゆさぶりは、七六年総選挙で江田派が大きくちよう落したために、田英夫ら数名の離党による社民連結成という、いわば小分裂で収まった。が、今回の総選挙では、山本幸一ら旧江田派の復活、かわって協会派の後退を結果し、中道四党の選挙協力による結束もあって、再度大きく右からのゆさぶりがかけられることは必至となっている。

さらに、選挙を前にした八月六日、大内力らの労働者自主管理研究会が、社会党の準綱領である「日本における社会主義への道」を全面批判する提起を行なった。それは、

①社会主義の必然性を労働者階級の窮乏化に求めることは今の実情にあわない、②社会党政権から社会主義政権への移行に強権的な政権維持の考えがある、③生産手段の公有化と計画経済だけに社会主義の目的を置くことは疑問、といったもので、総体を通じて「道」の基礎にあるスターリニズムの公式主義を批判している。これは同時に協会派の言う正統派マルクス主義の否定につらなるものである。

また協会派も、九月に出された『社会主義』で、地方選における保守・中道との連合をとりあげ、これが「反自民・反独占の大道から一部逸脱した」として批判し、飛鳥田体制への批判ははじめた。これらの論争は、選挙を理由に、「凍結」されたが、選挙後の内部論争の憤出は避けることができず、社会党は再びドロ沼におち込む事態に直面しようとしている。

動き出した。飛鳥田は選挙中に、政策中心の革新連合の基礎として七項目をあげたが、それは、汚職一掃・反増税・特権官僚退治といったものだけで、八〇年安保の実質的改定を目前にして、ことさらに安保問題を欠落させた。そして「汚職一掃・反大衆増税の国民連合」なるものを提唱し、次の参院選の一人区には「反自民共同推薦候補」を立てる足場を築き、「八五年までには必ず革新連合政権を樹立する」とうち上げた。この構想は明らかに、現実的に中道との連合をめざしたものである。事実、選挙後、自民党の過半数割れと協会派の後退を見てとると、飛鳥田はすかさず、公明・民社との交渉に入り、「国会内共闘」をふみ台に、来夏参院選に向けた社・公・民による「国民連合」の体制づくりに向けて急速に動き出したのである。

明らかに社会党は、中道勢力に傾斜する一歩を踏み出した。このことは、他方で進行する帝国主義労働陣営からの労働統一にひきこまれようとする総評指導部の方向と、びつたり歩調を合わせている。すでに全連は、この選挙で独自に公明党との選挙協力をはかった。また総評の左翼・ベネであった全金や国労にあって、今夏の大会方針では、資本の合理化と労働の右翼の再編に対する徹底対決の姿勢を、なし崩しにしようとしている。

こうして、五五年以来の自民党と社会党の二大勢力による保守対立の構造は、自民党の過半数割れと社会党・総評ブロックの中道勢力・同盟・JCへの傾斜の方向をあからさまにすることによって、根底から崩壊ははじめたのである。

まさに、社会党は、八〇年代の階級激動の予兆におびえ、「安保廃棄」という空疎なスローガンさえも投げ捨て、「革新」の首座からすべり落ちようとしているのだ。それは、明らかに、戦後の「革新」の反戦平和の幻想の自己破産を象徴するものである。

七〇年代にはいつて、議会主義への埋没があらさまにうち出され、選挙が地域活動の主要な位置を占めるようになっていたが、この構造はこれまで維持されてきた。

しかし、今回の総選挙において、日共は、全国一三〇の選挙区に一一一の候補をたて、それを「重点区」（必勝区ともいう）と「躍進区」に区別し、当選の有力な地区の必勝体制をもつてのぞんだのである。五六選挙区五七名が重点区とされ、党の力量を集中して選挙活動を行った。「赤旗」紙上には、連日、重点区候補が大幅的にとりあげられた。官本・不破をはじめとした党幹部の応援も重点区のみ。重点区ではない他区の組織の大半が重点区に送り込まれた。つまり日共の宣伝・人員・資金の総力が重点区に注ぎ込まれたのである。しかも、その選挙戦のスタイルは、これまでの地区党組織を前面におし出すのではなく、自民党のように、個人後援会をつくり、個人演説会をやって候補者の売り込みをはかるといったものであった。

この「重点区方式」による当選第一主義の「成果」が、全体で得票数を落としながら、議席の倍増を実現した最大の要因であったのである。

もう一つ、今回の日共の選挙戦の特徴をなすものは、「革新連合」の相手である社会党へのあからさまな批判を展開したことである。まず、官本は八月二〇日、「どのようにして一九八〇年代を革新連合勝利への道にするか」と題した論文を発表、翌日の「赤旗」に掲載した。その中身は、社会党・飛鳥田構想批判の全面展開である。そこで官本は、これまでの社・共の「共通の基本目標（経済の民主化、民主主義よう護・日米軍事同盟打破・中立化）」のもとで、「自民党政治と対決し、革新自治体をまもり、広範な革新勢力の統一のために努力する」と合意してきた内容を、飛鳥田が裏切っていると非難している。

この論文に続いて、解散前の九月上旬に、「二重段階論による統一戦線なあげの議論」「社会党主軸論の中心」「『百万党』建設のおしつけ」など、飛鳥田批判が次々と放たれたのである。

これに加えて、共産党は、今回の選挙で公然と社会党批判を展開した。日共は、「どのようにして一九八〇年代を革新勝利への道にするか」と題した官本頭治の論文を「赤旗」とパンフレットでバラまき、「社・公・民」中軸による全野党共闘を言う「飛鳥田構想」の全面批判をなし、社・共革新連合を強くつきつけた。

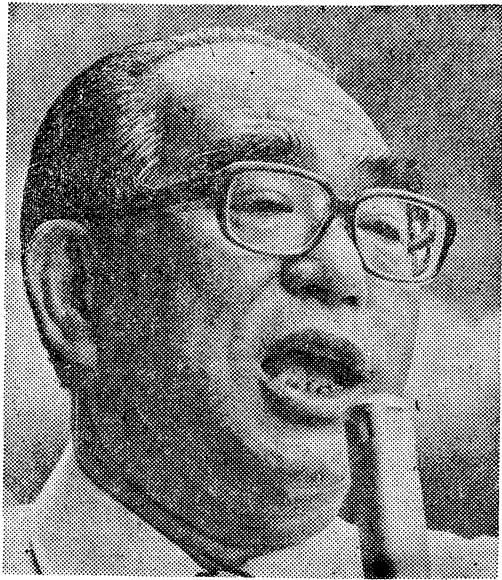
今回、共産党は四一議席（革新共同二名を含む）をとり、野党第三党となった。前々回の七二年総選挙で四〇議席の「大躍進」をなしたが、前回では一挙に半減し一九議席に転落した。今回は再び前々回の回復をなしたのである。

これらのことは、こんにちの共産党の「革新連合政権」への展望の喪失に対する抑えがたいいらだちの表明である。と同時に、「わが党が伸びることは革新統一戦線を主張する勢力が強くなること」「そうすれば、社会党も右より姿勢をあらためて、革新の側にくる可能性が大きくなる」（官本談話）という言葉に示されるように、「革新の大義」を共産党が掲げることによって、共産党の政治的位置を高める意図をはっきりとさせている。日共は飛鳥田を批判し、他方で協会派などに対しては「評価できる」ともちあげ、社会党分裂をねらった攻勢にうって出ているのだ。

まさに、社会党は内外から「右へ向くのか左へ向くのかはつきりせよ」（民社・塚本書記長）と迫られ大きく揺れ動いているのである。しかし、自らの当落の不安をのりきった飛鳥田体制は、その大勢をほぼ決めようとして

しかし、日共のこの「躍進」は議席数について見た場合にいえることであり、得票率で見ると七二年一〇・五％、七六年一〇・四％、七九年一〇・四％と全くの横バイ状態である。投票率の悪かった今回は、得票率では前回を下回る結果となっている。得票率、得票数ではとても「躍進」などと言えた状態ではないのだ。

今回の総選挙における共産党のこうした二つの特徴的な動きは、決して社会党の右傾化に対する日共の左傾化をあらわすものではない。



飛鳥田の連合に見いだした中道
社会党の活路を
低迷する

今回の「議席躍進」は、何よりも、前回三九名の大量次点者を出して敗れたことを総括した日共が、「重点区方式」を徹底化させたものである。

日共はこれまで、全選挙区で候補者をたて、当選の見込みの有無にかかわらず、地域での党宣伝、勢力拡大をはかってきた。つまり、地域活動の一環として選挙がたたかわれてきたのであ

七七年参院選では、反自民大連合のために「安保打破」をおろすと言った日共が、今回、あらためて「革新三目標」を前面に立てたのは、まさに党利党略のための方便以外ではないのだ。しかも、重点区方式による「議席躍進」は、今後八〇年代に向けて、日共が人民大衆のたたかひの現場から一層速のき、議席獲得のみをめざす選挙党への純化を色濃

くさせることを意味している。「たまたわな
い党」から「たまたわな党」へと転落しよ

うとしているのだ。

四、「保革共存」でなれあう議会の空洞化を 見すえ、80年安保粉砕の政治潮流を創 出せよ!

総選挙を終えた今、月末の特別国会開催を
前にして、自民党は太平の首班指名をめぐる
虚々実々の動きに奔走している。野党は来夏
の参院選に向けて、様々な連合工作の打診を
はじめた。

八〇年に向けて、新たな政治展開が動き出
したのだ。

かかる中で、われわれは、七九年総選挙の
結果と動向をふまえた上で、総体において、
以下の三点を確認しておきたい。

すなわち、その第一は、「五五年体制」と
いう自社による保革対決の構造が、政治的
にも勢力的にも崩壊し、ブルジョアジーにと
つて、どのような安定的で支配的な政治勢力も
つくり出しえない政治的混沌の時代を迎えつ
つあるということである。

自民党はその派閥対立を一層深刻なもの
とし、安定した挙党体制を維持できず、四年目
ごとの総選挙、三年目ごとの参院選、二年目
ごとの総裁選でますます動揺を大きくする以
外ではない。そして、中道勢力は、このブル
ジョア政治勢力の中核体である自民党に接近
し、他方では「労働統一」を画策して、社会
党・総評をも自陣営にとり込もうとしている。
社会党・総評は、こうした保守・中道によ
って「連合政権」「労働統一」のエサを目の

の前にぶらさげられる形で、とりのこされて
はとせりを露骨にしている。

これらの動きの中から、自民党・中道・革
新の様々な分裂、野合と離反が、バズルの組
合せのように幾通りもあらわれては消える、
文字通りの混沌の事態を予測することはきわ
めて可能なことである。つまり、社会党が今
年の地方選で見せた「ねじれ共闘」という現
象が、保守・中道・革新の全体にわたって生
じる可能性が一層大きくなってきているのである。

そしてこのことは、こんにちの情勢が、戦
後革命期にあって片山・芦田内閣がうたかた
のように生まれ消えていった、あのような政
治的大動揺が、八〇年代において再びつくり
出されようとしていることをはっきりと示し
ているのである。

第二には、かかる政治的混沌状況が議会の
空洞化をおし進める以外ではなく、かわって、
天皇・軍隊・警察・官僚による専横支配が、
前面にたちあらわれてくるということである。
有事立法論議をひきおこした「栗栖発言」
は、自衛隊幹部の言によれば「危機意識のな
い政治家連中が投げつけた爆弾だ」という
ことであり、元号法制化も、政府は当初から
「内閣告示」によるものとしていたことを、法制
化へと動かさ、公明・民社をもまきこんだ国

民運動としたのは、決して自民党の政党とし
ての指導性の発揮によるものではなかった。
政党が派閥抗争や選挙戦に明け暮れる中
で、日帝の戦争遂行の野望は、官僚や軍人の
手によって着々と進められてきたのだ。だか
らこそ、自民党の単独支配が危機におち入っ
たロッキード事件のさき、日経連の桜田が平
然として「警察と官僚機構、そして職場の労
働協会の三つが安定帯、これがあれば大丈夫」
と言いつつ放ったのである。

まさに、八〇年代の激闘は、議会内政の
抗争の内にあるのではなく、その外に、天皇
を頂点とした専横支配との対決にあるのだと
いうことを、われわれは、はっきりと見すえ
ておくのなければならないのである。

第三に、したがって、われわれは、八〇年
代における日帝ブルジョア支配との階級的攻
防の基軸が、あくまでもこの警察的官僚的軍
隊の専横支配による戦争策動との対決にある
ことをふまえ、八〇年安保粉砕をたたかいぬ
く一大政治潮流の創出をめざして決起しなけ
ればならないのである。

韓国民衆決起の壮大な足音が近づき、つき
刺すような叫びが高まる現在、今こそ日本人
民の階級的決起が問われているのだ。八〇年
防衛二法改悪をテコに、自衛隊の朝鮮出兵態
勢をもくろむ、この策動を身を挺して阻み、
打ち砕く決死の決起をたたかひとることこそ
激動の八〇年代、八〇年代政治危機を真に革
命的大激動へとおし上げる力である。

八〇年安保粉砕の全人民的潮流の創出をめ
ざし、この秋期政治決戦の完遂をめざして奮
闘しようではないか。

三里塚不当処分撤回!

11/8第三回不服審査会 に勝利せよ!

長谷川さんを支える会

さる八月二五日の第二回不服申
立審査会において、私達は多大な
勝利を獲得した。府教委側証人で
長谷川さんの「犯罪」を調査し、
且つ内申した角谷神夫氏は、①処
分理由は心証による、②現場は見
ていないし知らない、③逮捕した
機動隊員からは調査していない、
④本人および本人から要請のあつ
た弁護士からは調査していない、
⑤処分を通告しただけ、⑥警察へ
は教育委員会側からタレ込んだ、
⑦この場合(三里塚闘争の処分
のこと)は他の場合と違うから心証
で充分、と証言し、昨年来「手の
内は明らかにできない」とか「証
拠は逐次」と語っていた府教委の
処分理由は、「心証」以外なもの
でもないことが明らかになりました。

め、ありったけの「過激」用語を
もり込んだ「襲撃」論であるが故
に、公判を幾度傍聴しても彼らの
証拠は心証以外には絶対に出てこ
ないのです。

私達は、「三里塚闘争は他の場
合と違う」なる偏見と差別によつ
て、事実調査もなされぬまま心
証だけで、労働者がクビを切られ
ることを、正義と真実の名におい
ても許すことができません。
攻防の主導権と大義は、すでに
完全に私達の掌中であり、更に適
確に全人民の怒りの鉄鎚を打ちお
ろすことが私達の任務となつて
きました。

襲撃」論の撲滅、◎府教委の引き
のばし戦術粉砕、◎事実にもとづ
く公平な再処分、を実現すべくた
たかうことが問われています。
私達は一〇年でも二〇年でもた
たかひぬき、三里塚闘争に敵対す
る者は結局うち破られる以外にな
ないことを執念をもって示さなけ
ればなりません。事実を裏うちさ
れた正義というものの崇高さを府
教委につきつけてやるうではありませんか。

80年安保シリーズNo.2

日米安保体制

その歴史と現段階

定価 300円

対朝鮮共同作戦態勢へと転換する
日米安保の歴史と実態をあばく

もともと、当時の「革新」黒田
府政・伏見東大阪市政が福田反革
命と一味違うというポーズをとり、
労働者の三里塚闘争連帯を防ぐた